

国内最後の「雪下駄」屋の店仕舞い—平成21年3月31日—

志村 喬（上越教育大）

平成20(2008)年度最後の平成21(2009)年3月31日朝、新潟日報を開くと次のような見出しが飛び込んできた。

「雪げた作り伝統の技に幕 上越・竹田さん 国内ただ一人 高齢理由で決断」

5段抜きの記事は、国内最後の雪下駄職人である上越市東本町の竹田亀治さんが90歳の高齢となり、下駄作りが困難になったため区切りである年度末で店を閉じるとの内容。添えられた写真は、道具と材料に囲まれた作業場に座る竹田さんの年老いた姿であった。

竹田さんがお土産用にと近年作り続けてきたミニ雪下駄は、雪国高田に住む私にとっても県外・国外の知人を訪問する際に贈る定番のお土産として、活用させていただいてきた。昨年8月に渡英する際にも、物産センターに行き買い求めようとした。しかし、その時は品切れで展示用があるだけ。店員さんに聞けば、竹田さんが身体の調子を崩し製作できないため、展示用さえも借用物。暫くはお店にいても入手できないであろうとのことで、あきらめた。その後、自分用の「ミニ雪下駄」を求めなければと気になっている中での新聞記事だった。

竹田雪下駄屋さんには、2回ほど訪問してお話を伺ったことがある。1回目は、高校教師時代で、高教研地理分科会の研究会が高田で開催された時である（次の巡検記録に写真入りで掲載、「地理歴史・公民研究」第38集 pp.9-13,新潟県高等学校教育研究会地理歴史・公民部会編,2000）。この時の巡検は、高田市街地を徒歩観察するもので、上越地区の先生の案内のもと、神村提灯屋（大町五丁目）、うぶげや（毛抜き屋、本町七丁目）、吉田バテンレース（東本町二丁目）、町田醤油味噌屋（東本町三丁目）を見学した後¹⁾、竹田さんのお店へお邪魔し、製作の実演をみせてもらった。幾種類ものかなや道具に囲まれた作業場に竹田さん（当時81歳）が座り、材料である桐を足に挟んで素早く削っていた時に「シュツ、シュツ、シュツ」という音が印象深く耳に残っている。



2回目は、大学院社会系コース学生との巡検での訪問時である。この時は、町屋の作りにも皆が関心を示したところ、奥の居室まで招き入れて下さり、茶の間に座って天井はじめ部屋中をながめながらお話を伺うことになった。新井の街での修行、高度経済成長後の販売不振と同業者の廃業、活路としてのミニ雪下駄作り、全国各地での訪問実演販売などをお聞きした。とりわけ「昔は雪下駄は嫁入り道具の一つだった」との話は、実家にかつ

1) 上越市立総合博物館企画展図録『上越の職人—伝統の態と道具』（2006）には、雪下駄屋とともに提灯屋・うぶげや等の当時の様子が記録・紹介されている。

てあった下駄を思い起こさせた。私の実家は高田郊外の農村であり、1984年に古屋を建て替える前の玄関の下駄箱奥には、古びた下駄がいくつかあり、それらは確かに一本歯であ

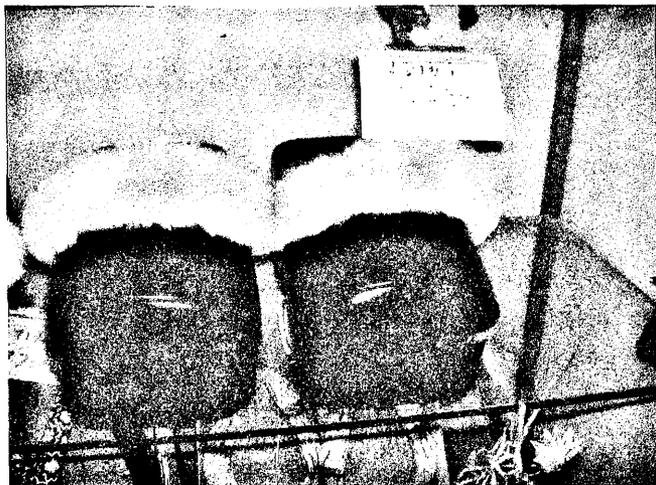


ったし、その中の一つは赤いつまがあったような気がする。母が近隣の農村部から嫁に来たのは1959(昭和34)年であり、嫁入りに雪下駄があったとしても不思議はない時代である。しかし、それらはやがて下駄箱の奥で埃をかぶるようになり、家の建て替え時には捨てられたのである。

新聞記事でそれら記憶が甦ったため、雁木に掲げられた「雪下駄 竹田」の名物看板だけでも今日中に撮影しておかなくてはと考へ、出勤途中に店の前を通り看板や店構えを写真に収めた。その時は、店内が暗く人の気配が無いようなのでもう店はたまたまれたのかと感じていた。



ただ、店じまいの3月31日は晴天で夕方でも写真が撮れそうであること、仕事も早めに切り上げることができたことから、帰路も再度お店の前を通ってみた。すると、町屋作りで暗い奥の茶の間に灯りが点き、ラジオのような音も聞こえる。そこで、六時をやや過ぎているがと思いつつ、店に入り声をかけると奥さんがでてこられた。新聞で店終いを知り訪ねて来たこと、買い求めることができる品があるか否かを尋ねたが、やはりミニ雪下駄は完売、自分たちの記念用もないとのこと。あるのは大人用雪下駄(二万一千円)か普通の子供用下駄(千六百円)だけとのことなので、とりあえず子供用下駄を記念に求めたいと話していると、奥から竹田亀治さんが出てこられた。



「本当は、いっぱい下駄が並んでないと駄目なんですけど、なーんにもなくてすまんねー、本当にすまんねー、せっかく来てもらいながら。下駄屋なんだし、いっぱい下駄がないといけんのだが、作らんねくてー・・・」というのが、客である私に対する

竹田さんの最初の言葉だった。さらに、夕方でもう一杯やっけてしまっているため顔が赤いかもしれないが勘弁して欲しい旨などが、続いた。

私の方こそ、店終いの遅い時間に訪ねたことをお詫びするとともに、今まで何度となく高田のお土産として贈り皆に喜ばれているので感謝している事などを伝え、店内の写真も何点か撮らせていただいた。最後に、子供用雪下駄を買い求め奥さんから袋に入れて頂いたところ、亀治さんは奥さんに、雪下駄の箱にいれる「雪下駄の栞」と「雪下駄竹田の看板の写真」も袋に入れて欲しいと話した。

そして、私が店を辞する時、竹田亀治さんは店の表戸、雁木際まで出て来て送って下さった。



*写真解説

(掲載順)

写真1：雁木が残る東本町にある店の名物看板

写真2：竹田履物店全景

写真3：下駄のショーケース。上段は雪下駄で、右側の二足は今では入手できない犬毛利用品で非売品。左側の二足はオットセイの毛を利用。

写真4：男性用雪下駄（犬毛利用の非売品）



写真6：店の一角にある仕事場

写真7：挨拶に出てこられた竹田亀治さん

写真8：竹田さん御夫妻

追記： 同日(2009年3月31日)の新潟日報には、次のような見出しの記事も掲載されていた。

「高田日活 歴史に幕 98年間営業 社長にねぎらいの花束」

「上越・高田測候所廃止で途絶 「開花宣言」復活します 市民が準備 標本木を選定」

